

くつろぎタイム

子どものころから、 趣味は「家にいない」こと。 新しい体験はストレスを 忘れさせてくれます。

株式会社近畿日本ツーリスト東北
代表取締役社長
仙台商工会議所 2号議員

のざき よしまさ
野崎 佳政 氏

昭和34年1月1日生まれ
静岡県東伊豆町出身
血液型A型



代の私は、2年生までに卒業に必要な単位のほとんどを取得してしまいましたので、3年生のとき、サーフィンをするために、カリフォルニアのサンディエゴに行っただけです。いろいろな人と出会い、新しいことを経験したり、発見したりするのがとても楽しくて、そのような時間を提供する旅行会社に興味を持ったわけです。この旅での経験はもちろんです。この旅での経験は、幼いころから何でもやってみようという手を出してきたことが、今の仕事にも生かされているのではないかと思います。

これまでのさまざまな挑戦も、 丈夫な身体があればこそですね。

そうなんです。私は生まれてこの方大きな病気やケガをしたことはありません。風邪などもほとんどひかず、先日、この年になって生まれて初めての点滴を経験したというぐらいです。ですから、特に食事面で気を付けていることなどはないのですが、何年か前、増えた体重を落とそうと、「走ろう」と思い立ちました。半年の準備期間を経て、挑戦した初マラソンが仙台ハーフマラソンで、周囲からは「これまで運動をしてこなかった人が何で無謀なことを！」と言われましたが、何とか完走することができました。年齢を重ねると、サーフィンをしたり、スノーモービルで山に登ったりといった、体力を使う運動はできなくなりますが、

ダイビングやゴルフはまだまだできません。体を動かすことは、これからも続けていきたいと思っています。

たくさん挑戦をしてもらいましたが、次は、何をしようと考えていますか。

これから自由な時間が増えていくと、「家にいない」という趣味に、より拍車がかかると思います(笑)。できれば、アジアのどこかの国に、セカンドハウスとまでは申しませんが、友人たちとマンションの一室を共有して、日本が寒い時期は暖かい国に生活のベースを移すというのでもいいかな...などと考えています。あとは、子どもたちが小さいときによくキャンプに出かけたのですが、これからはワンボックスカーに簡単な棚やベッドなどをしつらえ、簡易キャンピングカーにして気の向くまま出かけてみるのもいいかな...と考えるたりもしています。

最後に、お仕事の近況をお聞かせください。

私が入社した40年前の旅行業と今とは、状況が天と地ほど変化しています。昔は、旅行は1年とか数年に1回程度の特別なものでしたが、今はそう特別なものではなくてきています。個人向けの旅行が中心となり、その目的も「観る」から「体験する」へと様

昭和56年立教大学経済学部卒業後、近畿日本ツーリスト(株)に入社。初任地である長野県上田市を皮切りに東京、埼玉、静岡、栃木、群馬、福島などで営業職を中心に手腕を振るう。仙台には10年前に赴任。平成24年、社内の組織改編により(株)近畿日本ツーリスト東北が設立され初代社長に就任した。好きな言葉は「take it easy」。『気軽に「行こうぜ」というこのフレーズは、いつも私の心に余裕と戒めを与えてくれるのです』と話す。

とても珍しい趣味をお持ちと伺いました。

妻がよく言うのです。「あなたの趣味は家にいないことだ」と(笑)。思い起こせば、小学生時分から、学校から帰ってきて家にいた覚えがないほど、すぐに友だちと遊びに出かけていました。それが現在も続いている気がします。

私は静岡県伊豆半島の熱川温泉で生まれまして、窓を開ければ海が見え、裏手は山という田舎に育ち、遊ぶにはこと欠かない環境でした。小さいころはお寺の境内でベゴマやビー玉遊び、小学校の4、5年生になると、海に行っただけは魚を捕ったり、山に行っただけはタケノコ、秋はアケビ、冬は自然薯を掘ったりしていました。父が漁師で魚屋を営んでいましたので、店先に私のコーナーをつくってもらい捕ってきた

たものを並べて、小遣いを稼いだりもしていました。

お小遣いは何に使っていたのですか。

最初に買ったのが、ずっと欲しくて仕方なかった「ニコンF2フォトリック」というカメラです。小学6年生の時に、そのカメラを携えて伊豆から長野県の本曾に向かう夜行列車に乗り、SLを撮りに行ったのを覚えています。中学生のときには北海道に行き、高校生になるとバイクが好きになってツーリングにもよく出かけていました。長い休みには全国各地に出掛け、沖縄県の八重山諸島にある竹富島の民宿で3週間ほどアルバイトをしながら過ごしたりもしました。この他、ゴルフ場のキャディーや、大学時代は出版社で原稿を取りに行く仕事、外国から来たお客さまをもてなす仕事などもしました。両親が放任主義で昔から自由には、やりたいことに充てるといったことをしていたんです。大学の学費も自分で稼いでいました。

最も印象的な旅を教えてください。

大学時代に行ったアメリカ旅行でしょうか。それが、旅行会社に入るきっかけになったと思います。大学時

変わりして、自由行動型になっていきます。しかし、旅先で非常を感じたいというニーズは昔も今も変わりありません。ですから、これからの人口減少社会の中で、より多くの方々に仙台に来ていただくためには、仙台にしかない魅力をどう伝えるか、単に「仙台にはこれがありますよ」という表現ではなく、「仙台に来たら、こんな楽しみがありますよ」と発信することが大切だと思います。

その時のトレンドに沿って、地域の魅力を発掘し商品化するのが私の仕事です。旅行関係者だけではなく、そこで暮らす方々も一緒に発信することが、今後ますます重要になってくると思います。これからは仙台により多くの方に訪れていただきたいと思っています。



大学3年生のときに訪れたアメリカ西海岸、サンディエゴのパンフィックビーチにて。今も心の中にある「take it easy (気軽に「行こうぜ」)」のフレーズは、海沿いにある小さな宿のご主人がかけてくれた言葉。

やがて生まれ来る子供たちのために。

宇宙のオアシス『地球』。ただひとつの、この青い星を守って行かなくてはなりません。大切な人のために、そしてやがて生まれ来る子供たちのために。私たちは、よりよい環境をめざし、考えつづけます。



より良い環境をめざす
AOBA 青葉環境保全

本社/仙台市若林区蒲町19-1 電話(022)286-3161(代)